

**〈目 次〉**

○巻頭言	2
○研究室紹介	4
○特集 / 総科「飛翔アーカイブス」	15
	18
	22
	25
	27
	31
	35
	36

様々な科学の究極的総合をめざすものである。では、既存の個別科学の内側は旧態依然としたままなのかと云えば、逆である。学問における総合性は抗いがたい潮流であり、文系色の強い分野でも他の科学の成果を取り入れざるを得ない状況にある。

近代自然科学の誕生から現代に至るその発展を科学の細分化の歴史とすれば、それに対するアンチテーゼとしての科学の融合と総合も当然の流れである。科研費の分科・細目表にある「総合・複合領域」（情報学・脳科学・環境学・社会安全システム学等）はその反映である。この意味で総合科学は

私の研究分野は言語学・ドイツ語学だが、それは元来文学研究に属し、一般言語、日本語学、英語学、独語学、仏語学など言語別に区切られていた。しかし、今日では心理学・人類学・情報学・脳科学・生物学といった分野との協同が進んでいる。そこには、二十世紀から現代へと科学的知見が蓄積することで、これまで聖域であった領域についての問いが真剣な研究テーマになってきたということが挙げられる。たとえば言語の起源について語ることは、かつては不可能だった。1866年に設立されたパリ言語学会は規約の中に言語の起源をテーマとする論文は受けつけないことを盛り込んだ。ル

ソーヤヘルダーらによる哲学的な言語起源論はあったが、科学的観察を重視する言語学では、人類言語の起源がどこにあるのかについて知る手段はなく、それを論ずるのは思弁に過ぎないとして禁止を宣言した。十八世紀末におけるサンスクリット語の再発見に端を発した十九世紀青年文法学派らの歴史言語学の推進によって印欧祖語が再構築され、ヨーロッパとインドにまたがる広大な地域に一つの言語があったことが音韻比較によって示された。印欧祖語から分かれる言語系統樹も提案された時代にあっても、文字の無い先史時代、さらに遡って人類誕生期の言語については、身振り原型説や音楽模倣説、労働起源説、さらには神によるアダムの命名起源説など、憶測や想像の氾濫に歯止めをかけるすべがなかったのである。

しかし、ブローカが失語症患者の脳から大脳左半球のブローカ野を言語野として発見し、またウェルニケも別の

失語症に関するウエルニケ野を見つ  
け、次第に脳の部位に言語の能力が局  
在しているという認識が広がった。そ  
れをいわば理論化したのが、チョムス  
キーによつて一九五七年に提案され  
た生成文法である。言語の背後には人間  
という種に固有の言語能力があり、脳  
内に組み込まれ普遍文法が発現する。  
この説は伝統言語学と伝統心理学から  
は批判されたが、認知科学の発展を促  
した。さらに、脳神経科学の発達と幼  
児の言語獲得研究によつて、言語の生  
得性の考えは次第に市民権を得るよう  
になる。

ヒトの系統進化、脳容量の拡大、発  
声器官の形成、言語遺伝子の発見（F  
OX P2）など、言語学以外での人類  
学や遺伝子研究の進展によつて、人類  
を特徴づける言語の獲得シナリオにつ  
いて科学的議論が可能になった。チン  
パンジーと人類の共通祖先は約六百万  
年前に出現したと考えられており、言  
語の痕跡もそれ以後のどこかに見いだ  
せるはずだ。ただし、ホモサピエンス  
以外に音声言語を操るヒト科の仲間  
は皆無である（鳥類はさえずりによつて  
類似した発声能力を持つが、ヒトとは  
かけ離れている）。チンパンジーは、  
DNA塩基配列ではヒトとわずかの違  
いしかないが、音声言語能力は持たな  
い。チンパンジーは、声帯・喉頭が上  
がりすぎていて、口腔の共鳴空間が狭  
く、自由に音を出せない。面白いこと  
に、人間の赤ちゃんも生まれた当初は  
喉頭が上部にあり、成長とともに下が  
る。声帯が下がり喉の空間が広がるこ  
とで多数の母音や子音が出せるように  
なる（食物を喉に詰まらせて窒息する  
危険を代償に）。

ホモサピエンスの直系祖先であるク  
ロマニヨン人は知性と社会性を持ち、  
言語能力を持っていたと推定される  
が、それ以前のネアンデルタール人が  
音声言語を話していたかどうかは論争  
中である。脳容量は現代人と変わらず、  
しかもネアンデルタール人が絶滅した  
のが約三万年前と推測されるが、三万  
年という時間は進化時計ではごく一瞬  
にすぎない。数万年という僅かの間に  
言語が獲得されたシナリオを描くのは  
難しい。進化における言語の系統起源  
がどこにあり、言語獲得への適応的機  
能は何だったのか？そこから言語突然  
変異説、言語本能説、社会学習説など  
諸説が生まれ、論争が激化する。もつ  
とも今日では、様々な科学的間接証拠  
があるので、もはや言語起源論をタブ  
ー視する理由は存在しない。

このように、言語学という一つの学  
問、言語という一つの研究対象におい  
て総合的アプローチが必要なことは明  
白になっている。またそれは、人間と  
は何か、人間はどこから来たのかとい  
う最大の謎に迫る知的探求と結びつい  
ているのである。